

# アスペクト転換の適切な取り扱いを巡って：

## 移動様態動詞を題材としての一考察

神田外語大学言語科学研究センター

山田 昌史

本稿は、Talmy (1985)に端を発する移動様態動詞に見られるタイポロジー、特に着点付加による意味的含意の言語差を題材にして、アスペクト転換を適切に分析する手段を探ることを目的とする。移動様態動詞のアスペクト転換は、語彙概念構造の観点 (cf. 影山&由本(1997)、Rappaport-Hovav & Levin (1998)等) から、また、統語論の観点 (cf. Ritter & Rosen (1998), Borer (1998)等) から、さらに、両者のインターフェイスの立場 (cf. Snyder (1995, 2001), Mateu (2002)等) からなされてきたが、本稿は特に、英語・ロマンス語・日本語の動詞の形態プロセスに注目し、Lasnik (1999)のフランス語・英語の動詞上昇の違いに関する分析を拡張し、アスペクト転換は、個別言語の動詞における形態的合成プロセス（一致・複雑述語の形成）の違いにその言語的差異の在り処を求めることを提案する。つまり、アスペクト転換は、動詞を中心とする形態合成プロセスの差の違いから導き出されることとなる。

### Introduction

本稿は、移動様態動詞をめぐる種々の分析を概観しながら、結果性の認可条件を適切に捉える方法を探ることを目的とするものである。

Talmy (1985)では、移動動詞は「様態」を取り込むものと、「経路」を取り込むものが存在することを指摘し、また、そのどちらの概念を取り込むことを好むかについて、言語的差異が観察されることを指摘している。

- (1) a. The rock slid/rolled/bounced down the hill.
- b. Smoke swirled/rushed through the opening.

- c. I slip/rolled/bounced the keg into the storeroom.
- d. I ran/jumped/stumbled/rushed/groped my way down the stairs.

(Talmy (1985:63))

- (2) a. La botro entro a la cueva (flotando)  
 the bottle MOVE-in to the cave (floating)  
 ‘The bottle floated into the cave.’

- b. Meti el barril a la bodega cofandolo.  
 I-MOVE-in the keg to the storeroom rolling-it

‘I rolled the keg into the storeroom.’ (Talmy (1985:69-70))

(1)は、英語の例であるが、「移動」の概念にその「様態」を取り込み、1つの動詞の表す意味概念として表出している。一方、(2)は、スペイン語の例であるが、「移動」の概念にその「経路」を取り込んで、1つの意味概念を形成し、1つの動詞として表している。このように、移動動詞には、純粋な移動の概念のみではなく、その移動に附随する情報を動詞の中に取り込んで、1つの形態的具現形（つまり、1つの動詞）として語彙化することが可能である。また、Talmy は、上記のような「様態」+「移動」、「経路」+「移動」の概念化は、全ての言語で一様ではなく、どちらをより嗜好するか、言語的差異があることを指摘している。英語のようなゲルマン語は「様態」を、スペイン語のようなロマンス語は「経路」を好んで選択する。前者は *satellite-frame language*、後者は *verb-frame language* と呼ばれ区別される。しかし、2つの言語間が完全に独立的に存在するのではなく、*verb-frame* 言語にも「移動」+「様態」を表す動詞が存在することを Aske(1989)が指摘している。

- (3) a. Juan bailo en circulos.  
 Juan danced in circles (=around)
- b. La botella flota hacia la cueva.  
 the bottle floated towards the cave.
- c. El libro se deslizo hasta el suelo.

the book slide down to the floor. (Aske (1989): 3)

(3)のように、スペイン語にも、「移動」に「様態」が融合し、一つの動詞として具現化する移動様態動詞は存在していることが分かる<sup>1</sup>。しかし、ここで重要なのは、(詳細は、次節で述べるが)移動様態動詞は、着点と共に文を形成した時に、上記の2つの言語タイプによって、述語の含意する意味が異なったり、文法性の差が生じることが指摘されている。

- (4) a. John walked to the top.  
b. Juan camino hasta la cima.  
Juan walked up to the top

(4)の例で、着点を伴った場合、両言語で意味的含意が異なるとされる。(4a)の英語は、頂上への到着の含意があるとされるが、(4b)のスペイン語の例では、そのような意味的含意がない。つまり、両言語の移動様態動詞は、アスペクト的特徴において、性質を異にする。

また、ロマンス語と同様に移動の方向性を動詞に取り込むことを好む日本語 (cf.田中&松本(1997)) は、(5)のように移動様態動詞を持つが、着点と共起しても、ロマンス語と同様、「到着」の含意はない。しかし、ロマンス語と異なり、他の形態的要素の力を借りて英語と同様に到着を表すことが可能である。

- (5) a. 1人の男がポーチに?\*歩んだ/歩み出た。  
b. ヤシの実が浜辺に流れ着いた。  
c. 彼女は駅に走っていった。 (影山&由本(1997))

(5)のように、日本語において結果の含意が複雑述語を形成することで生み出されるということは、英語・ロマンス語とも異なる3つ目の言語パターンとして独立に論じる必要があると思われる。つまり、移動様態

---

<sup>1</sup> 英語には、以下のような移動動詞に「方向」が融合した動詞も存在する。

- (i) a. John entered the room.  
b. John passed the building.

この事実からも、verb-frame/satellite-frameの違いは、個別言語の指向性の問題であって、完全なパラメターの違いとして断じることはできない。

動詞が着点句と生じた時、その現れ方として、「英語のように着点のみで結果が表せる言語」「日本語のようにその意味的含意を持つためには複雑述語の形成が義務的となる言語」「ロマンス語のようにその意味的含意は統語的・形態的手段を講じても不可能な言語」の3つの言語的なタイプが存在すると言える。これらの事実を説明するために、これまで様々な提案が、語彙概念構造の観点 (cf. 影山&由本(1997)、Rappaport-Hovav & Levin (1998)等) から、また、統語論の観点 (cf. Ritter & Rosen (1998), Borer (1998)等) から、さらに、両者のインターフェイスの立場 (cf. Snyder (1995, 2001), Mateu (2002)等) からなされてきた。しかし、これらの研究の多くは、個々の言語の分析に終始するものや複数の言語を研究対象とするもののより一般性の高い普遍性に言及するものは少なく、上記の3つの言語のタイプの全てに渡って普遍的特徴と個別言語の特徴を端的に説明する議論は乏しい。本稿の目的は、移動様態動詞を題材として、本来的には非有界またはアスペクト性質が曖昧であるそれらの動詞に「結果」の含意を強制し、有界のアスペクト性を強いる普遍的規則とその個別言語の具現化に関して適切な取り扱いの手段を探ることを主題とする。このような試みは、言語の普遍性と個別性を考える上でも重要で、また、語の意味・統語的認可条件、そして形態的具現化を考察する上で重要であると思われる。

本稿の構成は以下である。1節では、基本的な移動様態動詞の特徴とそれぞれの言語におけるこれらの動詞の現れ方の違いについて、これまで観察されてきた事実をまとめる。2節では、移動様態動詞を巡る分析を3つの観点から概観する。3節では、1節で導き出された帰結を2節で概観する先行研究の利点・問題点などを踏まえて1つの試案を示す。最後に本稿をまとめる。

## 1. Basic Facts

本節では、移動様態動詞の基本的な事実をまとめる。まず、英語の事実を基に、移動様態動詞の基本的な特性を見ておく。

移動様態動詞は、以下のように、自動詞として使われる場合、自発的な動作主を主語に取る場合もあれば、そうでない場合もあり、また、他動詞として使われる場合もある。

- (6) a. John danced.  
b. Mary swam.
- (7) a. The bottle floated.  
b. The ball bounced.
- (8) a. I slide the keg (into the storeroom).  
b. I twisted the cork (out of the bottle).

(6)-(8)のように、動詞の項構造の側面からは一様ではないが、述語のアスペクト性の観点からそれぞれの述語を観察していくと、いずれの例も有界性が未定か非有界的な述語である<sup>2</sup>。

- (9) a. John danced for/\*in an hour.  
b. John swam for/\*in an hour.  
c. The bottle floated for/in an hour.  
d. The ball bounced for/\*in an hour.

これらの動詞は、基本的には、活動動詞であるため、(語用論的な観点を除くと)有界の解釈は持たない。しかし、以下のように、着点と共に生じると、どの述語も有界的な事象を表す述語に鞍替えするという特徴を持つ。このことは、述語の表す出来事がある一定期間で起こることを示す副詞句 in~の接続可能性を観察すると確かめられる。移動様態動詞は、以下のように、in~の時を表す副詞句と共起可能であり有界の出来事である。

- (10) a. John ran to the next town in/\*for an hour.  
b. John walked to school in/\*for an hour. (Tenny (1994): 77)

---

<sup>2</sup> 本稿では、(6)-(8)のように移動様態動詞には3つの形式があることを認めつつも議論を単純化するため、基本的には自動詞の移動様態動詞の例を用いて議論を進めてゆく。

- c. The bottle floated to the beach in/\*for an hour.
- d. The ball bounced to the river in/\*for an hour.

(10)では、どの例も単なる動作の意味ではなく、その動作主体が最終的にある位置に至ることを意味する。着点が文内に付加されることによってその動作の最終地点が明確となり、出来事の発生する時間的制限が述語の情報として付け加えられる。つまり、英語では移動様態動詞に着点を付与するとその述語のアスペクト的性質が変換され、有界な述語となる<sup>3</sup>。

同様のことは、Hoekstra (1984)が指摘するオランダ語の事実で確かめられる。

- (11) a. dat Jan wandelt  
that Jan walks
- b. dat Jan (naar Groningen) gewandeld heeft.  
that Jan to Groningen walked have
- c. dat Jan \*(naar Groningen) gewandeld is.  
that Jan to Groningen walked is

(Hoekstra (1984: 246))

Hoekstra によると、(11a-b)は、単なる動作を表す文である。(11b)では、一般的に非能格動詞が選択する助動詞を選択して、文全体の解釈はその方向への移動は表すが到着は含意しない。一方、(11c)のように、助動詞を非対格動詞が選択する助動詞に変えると、着点が義務的に必要となるだけでなく、その到着が含意される。つまり、移動様態動詞に着点を

<sup>3</sup> Tenny (1995)では、移動様態動詞は、以下の様な場所を表す要素 (Tenny はこのような要素を path-object と呼ぶが、) と共起すると、アスペクト的特性が未定であることを観察している。

(i) a. Mary walked the Appalachian Trail for days / in three months.  
b. Mary walked the Appalachian Trail for several weeks last summer but didn't walk the whole trail/didn't get to the end of it. (Tenny (1995): 51)

(ib)のように、到着を否定する節を後続させても矛盾が生じず、path-object を共起させる例では、上記の(10)の着点句を伴う例と異なり、アスペクト的特性が異なることを指摘している。

付加し到着の含意を強制すると、述語のアスペクト的性質が転換し、有界述語へと転換する。

このように、英語・オランダ語の例を見ると、本来的には非有界述語である移動様態動詞は、着点を伴うとアスペクトの転換が起こることが分かる。これはゲルマン語の特徴であって、ドイツ語においても同様のアスペクト転換が観察される。

- (12) a. wir haben geschwommen  
we have swum
- b. wir sind/\*haben zum Ufer geschwommen.  
we be/\*have to the bank swum

(McIntyre (2004: 530))

一方、Talmy が verb-frame language と分類するロマンス語だが、Talmy によると、「移動」と「様態」を1つの形式に合わせ持つ移動様態動詞は乏しいとされてきた。しかし、前節でも指摘したように Aske(1989)によると、以下のように、ロマンス語であるスペイン語にも「移動」+「様態」を1つの語彙とする移動様態動詞は存在する。

- (13) a. Juan bailo en círculos.  
Juan danced in circles (=around)
- b. La botella flota hacia la cueva.  
the bottle floated towards the cave.
- c. El libro se deslizó hasta el suelo.  
the book slide down to the floor. (= (3))

しかし、重要なのは、英語と異なり着点句を述語に付加しても結果を表す表現とはならないことである。つまり、アスペクト変換が起こらず有界の解釈を持たない。

- (14) a. Juan camino hasta la cima ?\*en dos horas.  
Juan walked up to the top in two hours.

b. Juan caminopor/a-travesdel tunnel ?\*en doshoras / dos horas.

Juan walked through the tunnel in two hours/for two hours.

(Aske (1989:7))

(14)のいずれの文においても、有界的な述語が共起可能な出来事の起こる期間を限定する副詞句とは共起できず、有界的な解釈は持てない。

このように、英語とロマンス語でアスペクト転換という観点に違いが生じる。ここまでの議論は、以下の例に端的に示される。

(15) a. The boat is floating under the bridge.

b. La barca galleggia sotto il ponte. (Foli & Ramchand (2001: 192))

(15b)は、(15a)に対応するイタリア語の例である。ここで重要なのは、(15a)は、単なるボートの動く様を示している意味と橋の下にゆらゆら移動していきそこにたどり着く意味があり、解釈上曖昧である。しかし、イタリア語の(15b)の例では、橋の下への到着の含意はなく、橋の下でボートがユラユラと動く動作の意味しかない。イタリア語の移動様態動詞は、着点を伴っても到着の意味は表せない。このように、ロマンス語では、移動様態動詞に着点を付与した際、アスペクト転換が起こらず着点の付加によって、その位置への到着の意味は含意できない。

ここまでまとめると、移動様態動詞が着点を伴った時、アスペクトの転換の有無が verb-frame language であるロマンス語と satellite-frame language であるゲルマン語の間に存在する。

では、日本語の移動様態動詞はどのような形で表されるのか？ Yoneyama (1986)、影山&由本(1997)などで指摘されているように、着点を移動様態動詞に付加しても到着は含意しない。しかし、ロマンス語と異なり、動詞に結果を表す形態素を添加し、複雑述語を形成することで到着を含意することが可能になる。

(16) a. ジョンが走った。

b. ?ジョンが駅へ走った。

c. ジョンが駅へ走っていった。 (Yoneyama (1986:1-2))



- (17) a. 1人の男がポーチに?\*歩んだ/歩み出た。 (影山&由本(1997: 128))  
 b. ヤシの実が浜辺に流れ着いた。 (影山&由本(1997: 151))

(16b)のように移動様態動詞に着点を付加させても、その動作の終点を意味することはできない。(16b)の「駅へ走った」は、文法的であるとしても、駅への到着は含意しない。)しかし、到着を含意できる補助動詞を本動詞に付加すると(16c)のように到着が含意される。(17)の例も同様で、どちらも到着を意味するためには、複雑述語の形成が義務的となる。(16)-(17)のそれぞれの例を述語のアスペクト的性質から検証すると、着点を伴い複合動詞の形をした移動様態動詞は、いずれも有界的な性質を示す。

- (18) a. ジョンは駅に1時間で/\*1時間走っていった。  
 b. 1人の男がポーチに1時間で/\*1時間歩み出た。  
 c. ヤシの実が浜辺に3日間で/\*3日間流れ着いた。

つまり、日本語では、移動様態動詞におけるアスペクト転換は着点の付属だけでなく動詞に結果を含意する形態素を添えて標示する必要がある。

ここまでの事実をまとめると、英語のようなゲルマン語では、移動様態動詞に着点を付加するのみで述語のアスペクト転換が生じ、述語全体が有界となり動作の終結を表すことができる。一方、日本語では、英語と同様なアスペクト転換を行うには動詞にさらに結果を含意する形態素の支えが必要となる。ロマンス語では、如何なる手段によっても移動様態動詞は結果を含意することがない<sup>4</sup>。このような移動様態動詞の結果性の含意は、アスペクト転換を基軸にそれぞれの言語の有り様を観察すると、アスペクト転換が、(A)着点の付加のみによってなされる英語などの言語、(B)着点+複雑述語によって表される日本語などの言語、(C)

<sup>4</sup> 後述するが、ロマンス語では、本来的に有界な移動様態動詞は存在する。ここで問題としているのは、本来的に非有界の移動様態動詞は、着点の付加を受けてもアスペクト性の変更を許さず、結果が含意されないことである。

その転換が手段を問わず行えない言語の3つのタイプにまとめられる。

本稿では、以下でこれらの事実を(1)語彙意味論の立場から扱った分析、(2)統語論的立場から扱った分析、そして、(3)形態論と統語論の接点からの分析の3つの分析を概観し、その利点・問題点などを指摘する。

3章では、基本的には(3)の立場を取りながらその分析を拡大し、また、Lasnik (1999)のフランス語と英語の動詞上昇の分析を採用して本節で述べた(A)~(C)のタイプをモジュール形態論の立場 (cf. 影山&柴谷(1989)) から1つの分析の方向性を示唆する。

## 2. アスペクト転換をめぐる3つのアプローチ

移動様態動詞のアスペクト転換における言語的変異については、これまで(1)語彙意味論的なアプローチ (影山&由本(1997))、(2)統語論的なアプローチ (Ritter & Rosen(1998))、そして(3)統語論と形態論の接点からのアプローチ (Snyder (1995, 2001)) と3つの観点が代表的であると思われるが、本節では、それぞれについて概観し、それぞれの利点・問題点を指摘する。

### 2.1 語彙意味論的立場からの分析

影山(1996)、影山&由本(1997)では、Jackendoff (1990)を基盤として、移動様態動詞のアスペクト転換を概念構造内の合成プロセスとその適用レベルの違いを仮定することで日本語・英語の違いを説明する。

語彙意味論では、動詞のアスペクト的特性によって以下の4つの構造的鋳型を仮定する。

- (19) a. [EVENT [ ]<sub>x</sub> ACTON-[ ]<sub>y</sub>] (活動動詞)  
b. [EVENT BECOME [STATE [ ]<sub>y</sub> BE AT-[ ]<sub>z</sub>] (到達動詞)  
c. [EVENT [ ]<sub>x</sub> ACTON-[ ]<sub>y</sub>] CAUSE [EVENT BECOME [STATE [ ]<sub>y</sub> BE AT-[ ]<sub>z</sub>] (達成動詞)  
d. [STATE [ ]<sub>y</sub> BE AT-[ ]<sub>z</sub>] (状態動詞) (影山&由本(1997:6))

移動様態動詞は、動作の移動する様を表すので活動動詞としての働きが

基本である。つまり、本来的には非有界である。しかし、着点が付属することで、アスペクト特性が非有界から有界へと変化し、最終的な場所に至ること示す達成動詞と同じ意味を表すことが可能となる。このようなアスペクト転換を捉えるために、影山&由本(1997)は、以下のような語彙構造内における事象構造の合成プロセスを提案している。

(20) 語彙概念構造における移動と到着の合成

y MOVE [Path VIA z] + BECOME [y BE [Source NOT-AT-z]/[Goal AT-z]]  
 (影山&由本 (1997:151))

(20)において、[y MOVE [Path VIA z]] の部分が本来の活動動詞としての移動様態動詞である。それに結果性を生み出す [BECOME [y BE [Source NOT-AT-z]/[Goal AT-z]]]の部分（着点句が表す事象構造）を合成することで全体として、出来事によってもたらされる変化を表す述語と同様な概念構造が組み上がる。そのため、(20)のような合成手段によって出来上がった概念構造を持つ移動様態動詞は、全体として結果を含意できるようになる。

前節で示したように、移動様態動詞における日英の違いは、以下のように、到着を表すために形態的な手段を用いるか否かの違いである。

(21) a. John ran to the station.

b. ジョンが駅へ?走った/走っていった。

日本語では、到着の意味を表すためには、「行った」のような結果性が明示できる形態素の助けを借りて、複雑述語を形成することが義務的である。影山&由本(1997)では、英語では、(20)のような事象構造の合成が語彙概念構造内で生じ、合成された事象に則して1つの動詞として音声化されるが、日本語では、そのような合成プロセスではなく、[MOVE]の事象と BECOME 以下の事象を別個の形態素によって生じさせるとする。つまり、英語の移動様態動詞の形成は、語彙概念構造内における事象構造の合成によりなされるが、日本語は形態的な手段を用いてそれぞれの事象構造に形態素を入れ込むことによってなされるとされ、日英語

の差は2つの事象構造がどのように形態的に具現化させるかの違いであるとされる。

この分析は、有界性の指定（ここでは結果の構成）は、英語では語彙構造内、日本語では形態素によってなされるとすることで、移動様態動詞が「結果」を含意するための語構成の部門が異なることを示唆する。このような考え方は、形態論のモジュール論（影山&柴谷(1989)）の提案に沿うものであり、語の意味と語形成を考える上で重要な視点である。

影山&由本(1997)は、移動様態動詞の豊富でないロマンス語（スペイン語）は、(20)のような事象構造の合成メカニズムが存在せず、語彙構造内でも形態素によっても2つの事象構造の合成ができないため、アスペクト転換が不可能であるとしている。しかし、なぜロマンス語にはこの合成プロセスが存在していないのか、原理的な説明がない。（後述するが）ロマンス語と英語・日本語には、他の語形成プロセスから考慮すると語形成のプロセス自体に大きな差があり、動詞を中心とする語形成プロセス全体からロマンス語の特殊性が浮かび上がると思われる。

## 2.2 統語論的立場からの分析

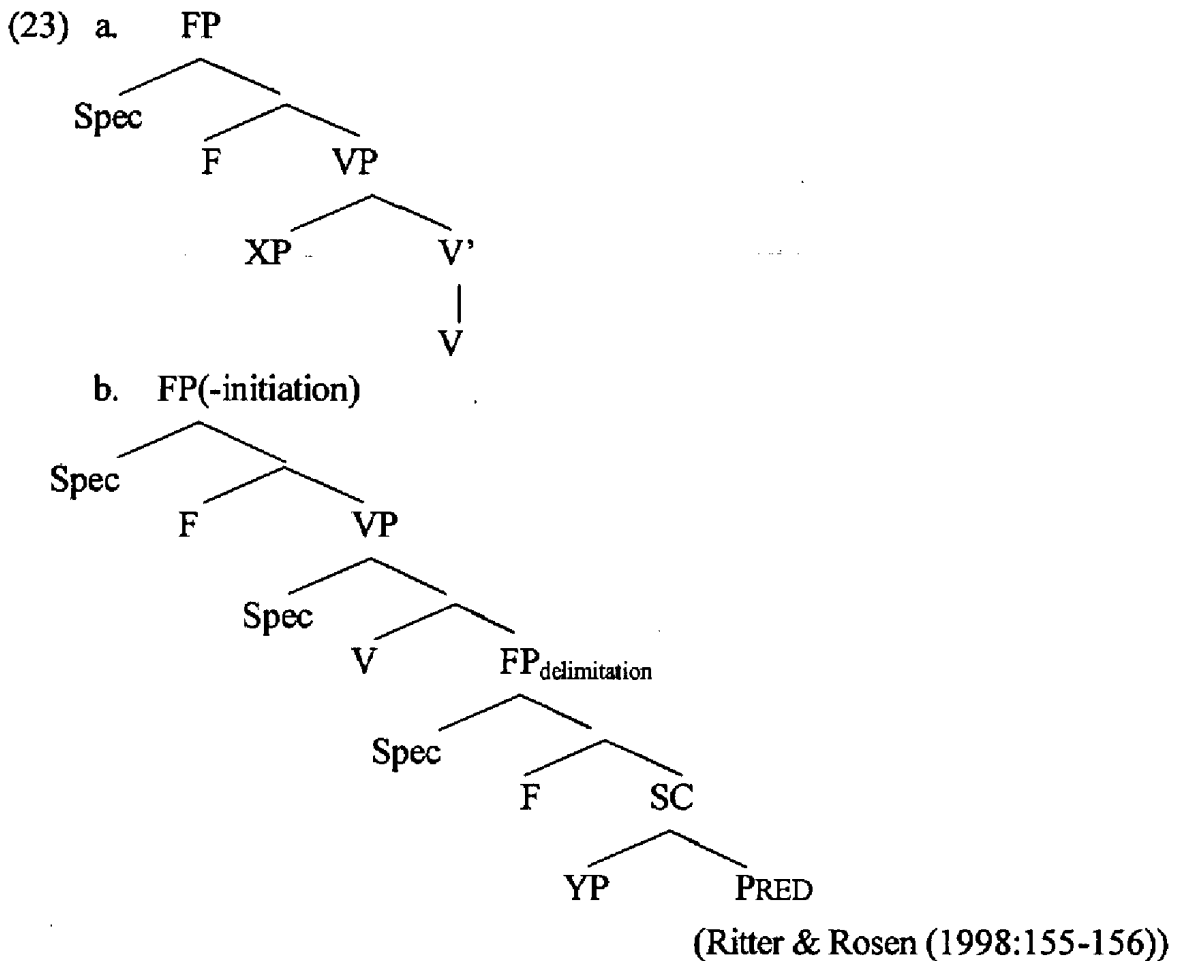
本節では、移動様態動詞のアスペクト転換を統語構造上の素性照合による認可のプロセスとする Ritter & Rosen (1998)の分析を取り上げ、その分析の妥当性を検討する。

Borer (1998)など、統語構造から述語のアスペクト的性質を予測しようという試みはなされているが、このような分析では、統語構造内に述語のアスペクト性の認可が可能な機能範疇を仮定して、その機能範疇内での素性照合によって、述語のアスペクト性を統語構造から予測することを試みている。述語の示すアスペクト的性質の違いによって、投射されうる統語構造が異なるとされる。Ritter & Rosen (1998)もこのようなアスペクト性と統語構造の関係を扱う分析を基盤として、英語の移動様態動詞の分析を行っている。(22)の2つの例は、表面上は同じ自動詞のように見えるが、1節でオランダ語の事実で指摘したように、(22a)は非能格述語としての性質を持つが、(22b)はその着点への到着が含意され

るため、非対格述語としての性質を持つ。そのため、それぞれの主語は、統語上に導入される際、位置が異なる (cf. Baker (1988)等)。

- (22) a. John walked.  
 b. John walked to the station.

非能格動詞として使われる非有界の移動様態動詞は(23a)の統語構造、移動様態動詞が着点を共起させ有界的な述語を持つものは(23b)の統語構造に投射される。



(23a)では、その動作主体は外項の位置である XP の位置に生成され、必要であれば出来事の駆動者を認可する FP 内に移動する。この構造は一般的な非能格自動詞の構造と変わるところはない。一方、(23b)のような非対格性を持つ述語は、変化主体とその変化内容(=Goal)が1つの事象であるとする前述の語彙概念構造の提案に従って、それを統語構造上

では、Small Clause (=SC)として標示する。そのため、移動の主体となる要素は、SC 内の YP の位置にまずその統語的位置を得る。そして、その SC を支配する述語全体が有界の特性を持つことを認可する機能範疇 (=FP)の Spec の位置へと上昇し、F の持つ delimitation の素性を照合する。この素性照合により述語が有界であることが認可される。つまり、Ritter & Rosen は、移動様態動詞に観察されるアスペクトの転換は、統語構造上の素性照合プロセスの違いとして分析する

この分析は、(22)の2つの文のアスペクト的性質と項構造の違いを統語構造から説明しうる点、また、アスペクト性は動詞や着点句のみの性質ではなく、述語全体の特性であることなどが正しく捉えられる。しかし、この分析が如何に普遍性を得て、ロマンス語や日本語の移動様態動詞の振る舞いの違いを説明するのかは明らかではない。仮に FP<sub>delimitation</sub> の具現形が個別言語ごとに異なると仮定して、ロマンス語にはこのような FP がなく、また日本語ではこのような FP の主要部は音韻的に標示される (Borer (1998)の指摘するヘブライ語の分析と同様) としたとしても、それらの違いをもたらす個別言語の特性とは何なのか、根源的な問題の解消とはならず、問題が残ると思われる。

### 2.3 統語論と形態論の接点からの分析

本節では、Snyder (1995, 2001)の統語論と形態論の接点<sup>5</sup>から、移動様態動詞のアスペクト転換の扱いをめぐる分析を概観する。

英語とフランス語やスペイン語などのロマンス語の間には、結果構文の生成に関して言語差があることが知られている。

- (24) a. John painted the house red.  
b. Jean a peint la maison (\*rouge) (フランス語)  
c. Juan pintó la casa (\*roja). (スペイン語) (Snyder (1995: 458))

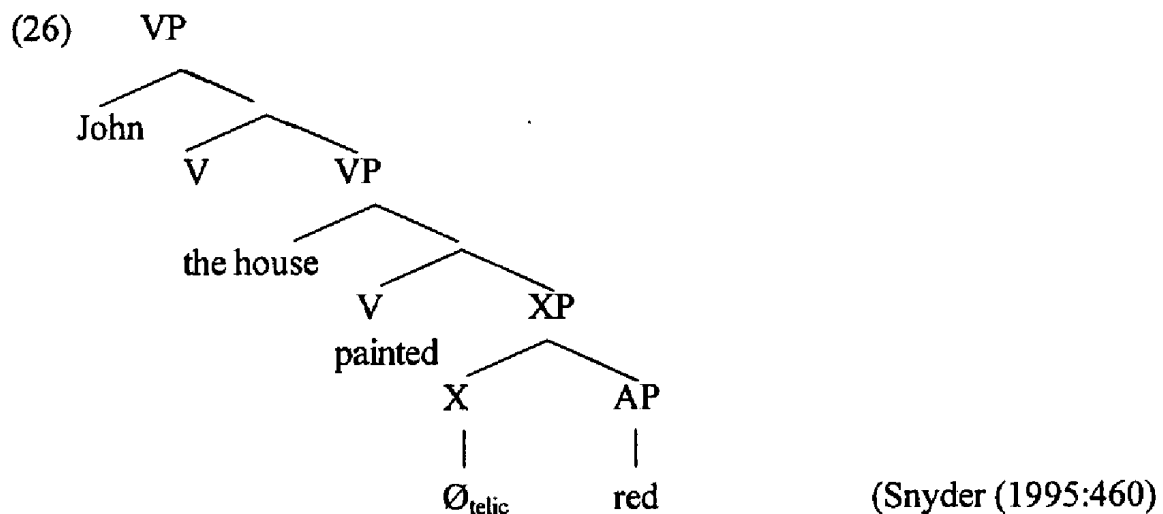
---

<sup>5</sup> Foli (2001), Mateu (2002)等では、Snyder (1995)の分析を発展させ、また、Hale & Keyser (2002)の分析を組み入れながらイタリア語・スペイン語と英語の結果構文・移動様態動詞の分析を行っている。本稿では、紙幅の都合上、これらの分析の詳細に立ち入れないが、これらも結果性の表現と言語的違いを考察する上で重要な研究である。

(24a)のように英語では結果構文の生成が可能であるが、フランス語・スペイン語ではそれが不可能である。このような言語的差異の説明するために、Snyder (1995)では、以下のように定義されるアスペクト転換が可能な音形に現れない形態素を仮定し、その存在の有無が結果構文の生成可否を決定すると分析する。

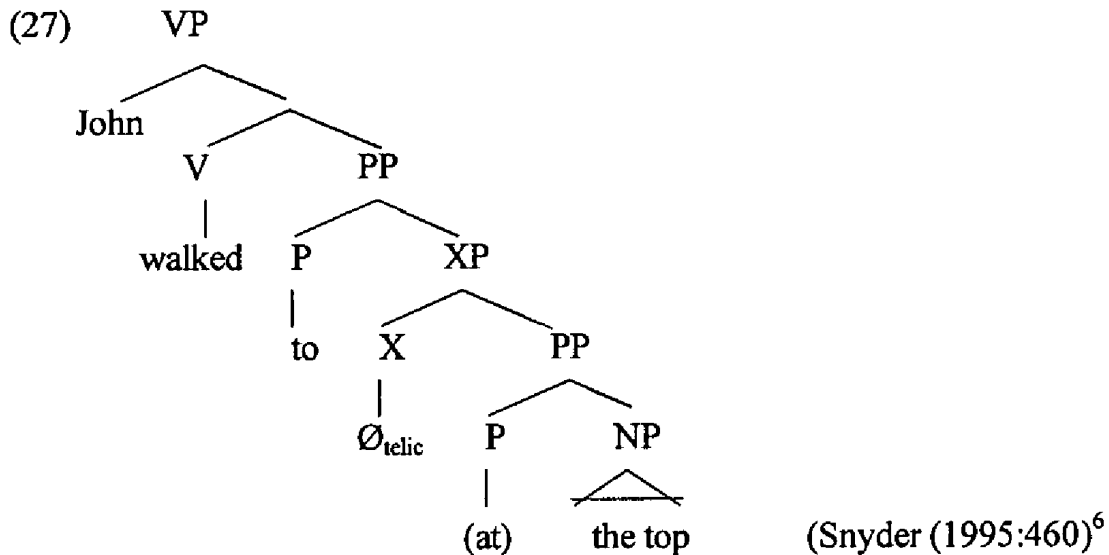
(25)  $\| \emptyset_{telic} \| (P) (e) = \text{True}$ , for any event  $e$  and any predicate of event  $P$ , iff for that event  $e'$  which is a subevent of  $e$  and which is the 'natural endpoint' of  $e$ ,  $P(e') = \text{True}$ . (Snyder (1995: 459))

ここで重要なのは、結果構文の場合、本来的に有界性の指定のない動詞に結果句が共起すると、これまで議論してきた移動様態動詞と同様にアスペクト転換が起こる。その転換を担って述語全体を有界的な性質とするのがこの形態素であるとする。Snyder は、このような形態素は、統語構造に以下のように導入されると主張する。



英語には(25)のような述語のアスペクトを有界性を帯させる性質を持った形態素が存在する。このような形態素が結果構文の生成条件に関わることで、述語の本来的な特性として有界的な解釈を持ち得ない述語に結果性をもたらす。同様の分析は、結果構文だけではなく、述語の有界的な特徴を含意することが構文生成の条件となる verb-particle 構文や移動様態を表す文でも同様であるとされる。本稿は移動様態動詞に関する考

察が主であるので、以下、Snyder(1995)が提案する移動様態動詞と(25)の音形のない有界的な特性を持った形態素の関係を概観する。Snyder(1995)が提案する英語の移動様態動詞の統語構造は以下である。



このように、移動様態動詞も  $\emptyset_{telic}$  が存在し、この形態素の働きによって述語が有界的なものへと転換する。そのため、移動様態動詞において着点位置への「到着」の含意が可能となる。一方、ロマンス語には、このような形態素が存在しないため、移動様態動詞において到着の含意がないと分析される。一体、このような音形に現れない形態素が個別言語に存在するか否かはどのような原則が支配しているのでしょうか？ Snyder(1995, 2001)では、複合名詞 (N-N) の存在 (または解釈) が  $\emptyset_{telic}$  がそれぞれの言語に存在するか否かを決定するとしている。例えば、英語には、teacup という N-N 複合語が存在するが、フランス語では、同じ表現を tasse a the のように複合語ではなく名詞句で表現する (Snyder (1995:469)。また、英語の frog man という語は、「カエルに似た人」「カエルのように振舞う人」「カエルを集める人」といった「カエル」から連想される様々な特徴を持った人という意味と「潜水作業員」というイディオム的な意味の2つが存在するが、frog man の相当するフランス語

<sup>6</sup> Snyder (1995)では、(27)のように、Location と direction の複合であると仮定している。そのため、P の投射が2つ存在し、それら2つの P と  $\emptyset_{telic}$  が複合した場合、着点としての働きがあり、到着点を示すとしている。



の *homme grenouille* は、後者の語彙的に決められた意味しか存在しない (Snyder (2001:328))。つまり、フランス語には統語的な N-N 複合語が存在しない、言い換えると、複合語を創り出す統語的メカニズムがないということである。複合語の構成において両言語に差があり、その複合可否が  $\phi_{telic}$  の言語に存在しているか否かを決定しているとする。つまり、ロマンス語は形態的な複合メカニズムが存在しないため、もし、このような形態素が言語にあったとしてもそれを結びつけるメカニズム自体がない。そのため、個別言語の特徴として、このような形態素を仮定できず、アスペクト転換が不可能であるということになる。

Snyder の分析で重要なのは、ロマンス語・英語に存在する「結果」の生成に関する言語差を形態素の特徴に位置づけたことである。この点において、これまで見てきた2つの分析とは異なる視点であることが分かる。述語のアスペクト転換を担うのは形態素であり、個別言語にそれぞれ語彙的な複合プロセスがあるかないかという一般性の高い原則のもとで、英語とロマンス語のアスペクト性の違いを捉えていることである。しかし、問題と思われるのは、N-N のような語彙プロセスが必ずしも結果構文やその他関連構文のアスペクト転換に直接的に影響を与えないケースもあることである。Snyder (2001)では、N-N 複合語が英語・日本語に存在し、また、両言語で結果構文の生成も可能であるとしている。しかし、既に指摘されている (影山(1996)、Washio (1997)) ように、日本語と英語の結果構文の生成条件は同じではなく、英語の方が日本語よりかなり自由に結果構文の生成を許す。また、日本語は N-N の複合語に加えて、上記で観察しているように、V-V の複雑述語の生成が可能であるが、英語の V-V の複合語は乏しい。このことから、ある言語に、N-N の複合プロセスがあるからといって複合プロセスが豊富であるとは、結論づけられず、また、複合プロセスがあるからといって、結果構文や移動様態動詞において同じ形でアスペクト転換が起こっているとは結論できない。英語・日本語・ロマンス語の3つの言語グループは、複合プロセスの違いから直接的に導き出されるのではなく、他の文法プロセスに付随した作用によって分割されるのではないかと思われる。

## 2.4 まとめ

本節では、移動様態動詞における到着の含意をどのように捉えるかに関して、3つの分析を概観してきた。影山&由本(1997)では、語彙意味論の立場から、事象構造の合成プロセスを仮定し、その存在、またはその適応部門の違いが言語的差異を生み出すとしていた。Ritter & Rosen (1998)では、統語構造上における素性照合によって有界性が保証されると分析していた。最後に Snyder (1995, 2001)では、有界性を生じる形態素を仮定することによって有界性の変更を予測していた。どの分析もそれぞれ異なる観点からの分析であるが、影山&由本(1997)の日本語、Snyder (1995)の英語の分析に共通して採用されているのが、アスペクト転換に関わるのは形態素であるとの認識である。この観点を追究し、また、ロマンス語においてどうして形態素によるアスペクト転換が不可能なのかを考察することで、「結果性の標示」に関する言語的な差異を何らかの文法規則に付随した個別言語の特性として還元できないものだろうか。次節では、Lasnik (1999)がフランス語と英語の動詞上昇の違いを説明する際に導き出した英語とロマンス語の統語構造上に導入される言語単位の違いの分析を基盤に、動詞を中心とする形態プロセスの言語的差異が、アスペクト転換の事実と符号することを指摘する。本稿では、特に、アスペクト転換の個別言語の持つプロセスの違いは、動詞を形成する形態プロセスの起こる言語部門の違いに還元できることを提案する。

## 3. 本稿の提案

1節で導き出された結論の要点をまとめると、移動様態動詞のアスペクト転換は、(A)着点を伴うだけで、有界述語に鞍替えする（英語などのゲルマン語）(B)着点を伴うだけでなく、動詞に結果を表す付加的な形態素を使って有界述語を作り上げる（日本語など）、(C)いずれの手段を使っても、有界述語とはならない（スペイン語などのロマンス語）の3つのタイプがあるといえる。本節では、アスペクト転換の言語的差異を2節で概観した先行研究を基に新たな分析の可能性を追究していく。

(A)～(C)のそれぞれのタイプに関して個々に見ていくと、まず、(C)のタイプの言語では、動詞に語彙的に指定されるアスペクト的性質は、どのような手段を伴っても変更不可能である。つまり、それぞれの語彙の持つアスペクト的性質は、語彙構造内で指定され、如何なる要素の助けを借りても変更ができない。移動様態動詞のアスペクト的性質は語彙的特性で、語彙構造内で指定され統語的・形態的な影響を受けない。本稿の主張は、ロマンス語においては、アスペクト転換を可能にする合成プロセスはない、つまり、語彙構造内で指定されたアスペクト性の変更は不可能であり、また、統語的にも形態的にもアスペクトを変換するような働きもプロセスも存在しないということである。(C)のタイプの言語は、アスペクト的には lexicalist の精神を全うする。

一方、(A)の言語では、アスペクトの転換が結果を表す着点の付加のみで可能であることから、何らかの結果を表す形態メカニズムが音形に現れずに存在し、その形態素の働きによって述語のアスペクト性が統語構造内で最終的な決定、または、語彙的に非有界的なものを有界的なものへと変更がなされると分析可能だと思われる。つまり、英語のアスペクト転換に関しては、Snyder (1995, 2001)の分析が基本的には正しく、英語には  $\phi_{telic}$  のような音形に現れない形態素が統語構造に存在しアスペクト転換がなされると分析する。

ここまでの議論から、ロマンス語では、アスペクト的性質は語彙内で決定され、英語などの言語では統語内で音形に現れない形態素の力を借りて決定されると言える。Snyder (1995, 2001)では、N-N 複合といった複合語形成メカニズムの有無がこのような形態素の存在を裏付けるとするが、前節で指摘したようにいくつか問題がある。本稿では、別の角度から、英語とロマンス語の違いを検証して、上記のような両言語の差異を説明する。

古くから指摘されているように(Emonds (1978))、英語とフランス語では、統語部門における動詞の上昇に関して違いがある。

(28)a. \*John likes not Mary. (cf. John does not like Mary.)

b. Jean (n') aime pas Marie.

Pollock (1989)、Chomsky (1993)は、Emonds(1978)のフランス語と英語の動詞上昇の事実をさらに精査し、フランス語・英語において、動詞の上昇が統語上でおこるのか、解釈のレベル(LF)で起こるのか、の違いであるとしている。また、その動詞上昇の統語上での有無の差は、一致形態素の豊富さに端を発するとしている。

Lasnik (1999)では、Pollock らの分析を受けて、動詞の上昇の有無を統語構造に導入される INFL と動詞の単位の違いに求める。Lasnik は、INFL は素性として統語構造に導入される場合と形態素として導入される場合の2つがあり、また、動詞も同様に屈折や一致などの素性を含み十分に活用した形で統語構造に導入される場合とそのような要素を持たずそのまま導入される場合の2つがあるとする。INFL と動詞がどのような形での統語構造に導入されるかは、4つの組み合わせがあることになるが、フランス語は、INFL は素性の束として動詞は十分な屈折要素を持って統語構造に導入され、英語は INFL は形態素で動詞も形態的な一致要素を持たず、いわば裸の形で統語構造に導入されるとされる。以下が Lasnik(1999)が仮定するフランス語と英語の統語構造である。

(29)a. .... INFL .... V ....

[F] [F] (フランス語)

b. .... INFL .... V ....

-Af bare (英語) (Lasnik (1999: 105-106))

フランス語の場合、(29a)のように INFL・V 共にある特定の素性を持って統語構造に導入され、V が INFL に上昇することにより両者の素性照合がなされ、(28b)の正しい語順が生成される。英語の場合、-Af は、拘束形態素であるので、必ず意味をもつ形態素と融合して音形を持つ。Lasnik (1999)では、その融合が PF でなされるとし、以下のような条件を仮定している。

(30) Affixal Infl must merge with a V, a PF process (distinct from head movement) demanding adjacency. (Lasnik (1999: 105))

-Af が V と融合するためには、両者が PF での隣り合った関係にあることが必要で、両者の間に他の音形に現れる要素が介在してはならない。(28a)は、(31a)のように -Af と V の間に not が介在することとなり、PF における隣接性が満たせず排除される。

(31) a. .... INFL                      V ....      \*Mary not like John/  
           -Af            not            like      \*Mary like not John.  
           └─── × ───┘

b. ...INFL                      V                      Mary does not like John  
       do-Af            not            like

(28a)の文を文法的な文とするためには、-Af を孤立させない手段をとる。つまり、音として具現化できうる形にする必要がある。そこで、(31b)のように -Af に do 融合させ、-Af を音声化して文法的な文を生成する。

本稿の議論にとって重要なのは、Lasnik(1999)が、フランス語では動詞は十分な一致形態素を持った形で統語構造に導入される、言い換えると、その形態素の音声的具現形は語彙のレベルで決められるのに対して、英語では動詞は「裸」のまま導入され、その一致形態は統語構造上の形態素によってなされることとなる。この分析は、本稿が議論しているアスペクト転換の事実と符合する。つまり、ロマンス語では、動詞の一致形態素が語彙的段階で全て決定されて統語構造に導入されるのと同様に、アスペクト的性質も全て語彙的性質として決定され、統語構造上に導入される。そして、統語構造上で、その語彙的に指定されたアスペクト的性質は照合される。このような分析の妥当性は、以下の Aske(1989)の観察する事実によって確かめられる。

(32) Juan subio a/hasta la cima en dos horas.

Juan went-to/up-to the top in two hours. (Aske (1989: 7))

Aske によると、(14)と異なり(32)の動詞は、もともと有界であり、着点句の有無によらず有界の性質を示すという。つまり、語彙的に有界であり、着点句の有無はそのアスペクト性に関与しない。このことから、ロマンス語では、動詞の有界性は語彙的に決定されるものであって、他のレベルで指定されるものではない。

一方、英語の動詞は形態的に「裸」で統語構造に導入され、統語上、他の形態素-Af と融合が可能である。つまり、Snyder の主張のように、述語のアスペクト的特性は、音形に現れない形態素として導入され、それを動詞と融合することでアスペクト転換が起こる、または、アスペクト性が指定されると考えられる。このことは、Goldberg (1995)が観察する例によって支持される。(33a)のように動詞に後続する前置詞句は、位置と方向の2つの解釈を持ちうるが、(33b)のようにこの前置詞句が文頭に繰り上がると位置のみの解釈しかないとされる。

(33) a. He ran inside the room. (Locative / Directional)

b. Inside the room he ran. (Locative / \*Directional)

(Goldberg (1995: 158))

この事実は、結果を構成する形態素と動詞の間に隣接性の必要性を示すものであり、Snyder (1995)の分析に端を発する本稿の提案の妥当性を示す。

このように、動詞上昇の分析を基盤にした統語構造上に導入される形態素の種類の違いを考慮すると、Snyder (1995, 2001)が主張する形態複合語の生成可否の可能性に言及せずに、動詞がどのような単位で統語構造に導入されるかといった、より一般性の高い原理にその言語的差異の問題の在り処を求めることができる。

では、上記の(B)タイプである日本語はどのように考えればいいのか？日本語に動詞上昇存在するか否かの議論はしないが、少なくとも日本語は、影山&由本(1997)の分析から、英語タイプのアスペクト転換を行っていることは明らかである。つまり、ロマンス語のような語彙論的立場でアスペクト的性質の固定がなされるのではないということである。ま

た、既に述べたように、日本語では、英語と違って、単なる着点の付与のみではなく、動詞に結果を含意する音韻的な形態要素の付与が必要となる。つまり、結果性の標示を統語構造内での音形のない形態素の付加によるアスペクト転換ではなく、最終的な結果状態が形態的に具現化することによって可能となる<sup>7</sup>。日本語は、先行研究（影山(1999)、Kageyama (2001)等）が指摘するように、結果を表す動詞由来名詞を形成する際には、その結果として生じる要素を名詞の一部として標示する。

- (34)a. 吠え声                      b. 掘り出し物  
      c. 住処                        d. 咬み傷                      (Kageyama (2001:44))

また、Kishimoto (1996)、岸本(2001)、Tsujiura & Iida (1999)などがその研究対象に取り上げる形態素「かけ」などに代表される以下のような動詞のアスペクト的段階を標示する形態素が豊富である。

- (35)a. 飲みかけのビール      b. 読みかけの本  
      c. 渡しかけの手紙                      (岸本 (2000:74-75))  
(36)a. 炊きかけのご飯      b. 焼きたてのパン  
      c. 切りさしの大根      d. 食べ頃の梨      (岸本 (2001 : 104-105))

このように、日本語は英語と比較してはるかに複合語プロセスが豊富で、特に、アスペクトの標示に関しては、段階に応じて細かく、その様相を切り取ることができる。このような事実から、日本語ではアスペクト転換、特に、結果性の創成に関与するのは形態素であるといえる。日本語では、英語と違って統語構造においてではなく、形態部門において結果が創出されるのではないかと結論付けられる。

---

<sup>7</sup> 本稿の分析は、Hasegawa (1998)の結果構文の分析、つまり、結果構文は統語構造上において結果を表す形態素によって複雑述語を形成するとする分析に通ずる。しかし、本稿は、日本語における結果の生成は統語構造によってなされるものなのか、また、英語の  $\phi_{res}$  の形態的具現化と分析することが妥当なのか、日英の形態素や語形成手段など幅広い現象の考察が必要であると思われるので、本論では Hasegawa (1998)の統語論からの分析の妥当性を認めつつも、日本語における結果の標示を形態部門によるものとし、日英語では結果の生成部門が異なるとしておく。

以上、まとめると、本稿の主張は、Lasnik (1999)の主張する動詞の一致形態を基軸とした動詞要素がどのような形態的なウェイトを持って統語構造に導入されるかの言語的差異は、アスペクト転換に関しても重要な意味を持つことを指摘した。つまり、ロマンス語は、語彙構造内で動詞の情報が一致・アスペクトともに指定され、統語構造に動詞が導入された後にはアスペクト性は変化しない。一方、英語はそれらがどちらも（音形に現れない）形態素であり、動詞とアスペクト性は別個の要素として統語構造に導入され、動詞本来のアスペクト性がアスペクト性を変更可能な形態素の働きによって統語構造上で変換可能であると分析した。さらに、日本語は、基本的には、英語のようにアスペクト性の変更が可能だが、そのためには、必ず結果を含意する形態素の出現が必要であること、また、日本語は英語に比べてはるかに結果を標示する形態素が豊富であることなどの事実から英語とは結果を作り上げる言語的な部門が違っていると分析した。つまり、結果の創成に関しては、以下の3つの言語タイプが存在し、語彙部門・統語部門・形態部門とそれぞれの段階でアスペクト性の認可がなされることが分かる。まとめると、以下のようになる。

	ロマンス語	英語	日本語
動詞／INFL	fully inflected	Bare	---
アスペクト転換	NO	YES / $\emptyset_{telic}$	YES / morpheme
言語部門	Lexicon	Syntax	Morphology

このことから、アスペクト性はそれぞれの言語の形態素とそのプロセスに帰すことができると考えられる。つまり、アスペクト性の転換は、言語ごとに異なったプロセスではなく、動詞の形態がどの言語部門で形成されるのかといった言語それぞれの語形成メカニズム、また、結果そのものを作り出す形態プロセスの存在から導き出されると考えられる<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> ここまでの議論から、一致形態素の豊富な言語ほど形態プロセス (N-N, V-V) が乏しく、一致形態素が貧弱な言語ほど形態プロセスが多くなることが分かる。このことが何を意味しているのか、今のところ不明だが、両者の関係をより深く考察することで、統語論と形態論の関係がさらに明らかになることが期待される。



#### 4. まとめと残された課題

本稿は、移動様態動詞についてこれまでの先行研究によって指摘されてきた日本語・ゲルマン語・ロマンス語の3つの言語タイプは、全くことなる手段を用いてアスペクト転換を行っていることを確認した。移動動詞のアスペクト転換における言語的差異は、以下のようにまとめられる。

- A. 述語のアスペクト性は語彙構造で指定され、他の言語部門では変更が不可能である。 (ロマンス語)
- B. 述語のアスペクト性が他の言語部門で変更可能であるが、それが、
  - B-1 統語構造において音形に現れない形態素によってなされる。 (英語などのゲルマン語)
  - B-2. 形態部門によって結果を表す形態素を用いてなされる。 (日本語など)

本稿では、上記の3つの分類を(1)Lasnik (1999)の提案する統語構造に導入される際の動詞と Infl 要素の単位の違い、(2)「結果」を生ずる形態素の違いの2つの原則から導かれることを主張した。(1)によって A と B の二分割が、(2)によって B がさらに2つに分割されることになる。つまり、移動様態動詞におけるアスペクト転換は、一致形態素の豊富さと複合形態プロセスといったそれぞれの言語が固有にもつ形態プロセスに帰することができることを提案した。また、その形態プロセスは、言語ごとに生じる言語部門が異なることを主張した。

本稿の分析は、移動様態動詞を用いて、それぞれの言語における形態的プロセスの違いのみに着目して行った分析である。そのため、さらなる広い言語事実を加味して、分析の精密性、妥当性を追求していく必要がある。また、移動様態動詞のアスペクト転換と同様な言語的差異を生ずる結果構文など、結果性を表す構文などの分析に有用であるのか検証することが必要であり、「結果の標示」に関する言語の普遍性・個別性に関して更なる考察が必要である。

(参照文献)

- Aske, Jon. (1989) Path predicates in English and Spanish: A Closer look. *BLS* 15, 1-14.
- Baker, Mark. (1988) *Incorporation: A Theory of grammatical function changing*. Chicago, Chi.: University of Chicago Press.
- Borer, Hagit. (1998) Deriving passive without theta roles. In (eds,) Steven G. Lapointe, Diane K. Brentari and Patrick M. Farrell, *Morphology and its relation to phonology and syntax*. 60-99. Stanford, Cal.: CSLI.
- Chomsky, Noam. (1993) A Minimalist program for linguistic theory. In (eds,) Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, *The View from building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Emonds, Joseph. (1978) The Verbal complex V'-V'' in French. *Linguistic Inquiry* 9, 151-175.
- Foli, Raffaella. (2001) *Constructing Telicity in English and Italian*. Doctoral Dissertation, University of Oxford.
- Foli, Raffaella. and Gilliam Ramchand. (2001) Getting results: Motion constructions in Italian and Scottish Gaelic. *WCCFL* 20, 192-205.
- Goldberg, E. Adele. (1995) *Constructions: A Construction grammar approach to argument structure*. Chicago, Chi.: University of Chicago Press.
- Hale, Kenneth and Samuel, J. Keyser. (2002) *Prolegomenon to a theory of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hasegawa, Nobuko. (1998) Syntax of Resultatives. In K. Inoue (ed.), *Researching and verifying an advanced theory of human language (2)-A*, 31-58. Kanda University of International Studies.
- Hoekstra, Tenu. (1984) *Transitivity*. Dordrecht: Foris.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版.
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版
- Kageyama, Taro (2001) Polymorphism and boundedness in event/entity nominalizations. *Journal of Japanese Linguistics* 17, 29-57.

- 影山太郎・柴谷方良. (1989) 「モジュール文法の語形成論：「の」名詞句からの複合語形成」久野・柴谷方良（編）『日本語学の新展開』139-166. くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子. (1997) 『語形成と概念構造』 研究社.
- Kishimoto, Hideki (1996) Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis. *Language* 72, 248-286.
- 岸本秀樹 (2000) 「非対格性再考」丸田忠雄・須賀一好（編）『日英語の自他の交替』71-110. ひつじ書房.
- Lasnik, Howard. (1999) Verbal morphology: *Syntactic Structure* meets *The Minimalist Program*. In H. Lasnik, *Minimalist analysis*, 97-119. Malden, Mass.: Blackwell Publishers Inc.
- Mateu, F. Jaume. (2002) *Argument structure: Relational construal at the syntax-semantic interface*. Doctoral Dissertation, University of Barcelona.
- McIntyre, Andrew. (2004) Event paths, conflation, argument structure, and VP shells. *Linguistics* 42, 523-571.
- Pollock, Jean-Yves. (1989) Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Rappaport-Hovav Malka. and Beth Levin. (1998) Building verb meanings. In (eds.) M. Butt and W. Geuder, *The Projection of arguments: Lexical and compositional factors*, 97-134. Stanford, Cal.: CSLI.
- Ritter, Elizabeth and Sara T. Rosen. (1998) Delimiting events in syntax. In (eds.) M. Butt and W. Geuder, *The Projection of arguments: Lexical and compositional factors*, 135-164. Stanford, Cal.: CSLI.
- Snyder, William. (1995) A Neo-Davidsonian approach to resultatives, particles, and datives. *NELS* 22, 457-471.
- Snyder, William. (2001) On the Nature of syntactic variation: Evidence from complex predicates and complex word-formation. *Language* 77, 324-342.
- Talmy, Leonard. (1985) Lexicalization pattern: Semantic structure in lexical forms. In (ed.) T. Shopen, *Language typology and description 3: Grammatical categories and the lexicon*. 57-149. Cambridge, Mass.: Cambridge University

Press.

田中茂範・松本曜. (1997) 『空間と移動の表現』 研究社

Tenny, Carol. (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantic interface*. Dordrecht: Kluwer Academic Press.

Tenny, Carol. (1995) How motion verbs are special: The Interaction of semantic and pragmatic information in aspectual verbs. *Pragmatics & Cognition* 3, 31-73.

Tsujimura, Natsuko and Iida Masayo. (1999) Deverbal nominals and telicity in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8, 107-130.

Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.

Yoneyama, Mitsuaki. (1986) Motion verbs in conceptual semantics. *Bulletin of the faculty of humanities* 22, 1-15. Seikei University.

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学言語科学研究センター

*myamada@kanda.kuis.ac.jp*